

年 頭 所 感



「品格」と「品確」は活動の両輪

(社)日本技術士会北海道支部 支部長
技術士（応用理学／総合技術監理部門）

大 島 紀 房

あけましておめでとうございます。昨年の流行語『ユーキャン流行語大賞』の一つに数学者藤原正彦氏の『国家の品格』から広まった「品格」が選ばれた。その表彰式に出席した藤原氏は「今の日本は品格と正反対に向かっている」として、早速『国家の墮落』と題して文藝春秋（新年特別号）に特別寄稿した。特に「アメリカを真似た市場原理主義が、かつて日本が味わったことのない地域格差、リストラ、……を発生させ、改革の名のもとに国柄を壊しつつには教育まで」と怒り心頭である。その内容の解釈の是非は別として、確かに「品格」に欠けた世の中であることは間違いない。技術士会の本部が六本木ヒルズに近いこともあり何度か入館した。かつては「これがIT 勝ち組の拠点か!!」と感嘆したものだが、「マネーゲーム」ともとれるライブドア、村上ファンド事件の影響か、楽天やヤフーが“引越し”を決めている。「本業を軽視する企業」のイメージ脱却からヒルズ離れがとまらない。

1月の新年交歓会で都丸会長が行動原則の順守、相互研鑽、資質向上を誓い「技術士プロフェッション」を宣言し、社会に対する「品格」と「品確」の重要性を強調した。わが技術士活動の行動規範の両輪としたい。

昨年11月のセンター及び支部の臨時総会で新年度から両組織は一つに統合し、オール支部として活動を開始する。40年間の技術士活動の節目としてセンター会員には大きなご理解をいただいた。支部が、今年も取り組む当面の大きな課題は二つ。一つは「第3期科学技術基本計画」の中で「科学技術の社会還

元とそのための人材育成」がうたわれているが、さて何をするかである。医師が「健康」を、弁護士が「社会正義」を使命とする。それに比べ技術士の使命が漠然とし、国民には解りづらい。技術士法ができて50年。ようやく解り易さの一端が2004年の「技術士ビジョン21」に打ち出された。「公共の安全、環境の保全、その他公益に関係の深い業務には責任者として技術士が担当する」。要は「公益確保の責任者」。完全ではないものの国土交通省の建設関連事業、科技庁の原子力事業、裁判所での鑑定人、大学・高専などの教授などの分野で技術士の活用が推し進められてきた。さらなる活用拡大を図りたい。

もう一つは北海道の元気を取り戻すための「社会貢献」。2004年札幌での全国大会のテーマであり、支部活動の中心で社会的評価が高い。ボランティア活動に負うところが多いが災害に強い地域づくり、地域の産業育成、小～中学生の教育サポート、アジアとの連携をも視野にいれた活動をさらに拡大していきたい。いずれも「科学技術の社会還元とそのための人材育成」に則るものである。特に、私たちが全国大会あるいは総会の講演、講師にお招きした「北大リサーチ&ビジネスパーク構想」の西村紳一郎教授グループの糖鎖工学、喜田宏教授グループの人獣共通感染症などの研究は世界中が期待する。スーパー新産業、新事業の創設に繋がるもので、ぜひ“道州制の目玉”として北海道の新産業として実現させたい。この分野には技術士会も係わりが深く『北海道の新たな飛躍』に貢献したい。

本年も宜しく願いいたします。